

人に伝えたい大切な事、伝えるべき事を、心中に抱えている人は少なくないでしょう。しかし皮肉なことに、それが大切なことであればあるほど伝えるのは、より難しいのだと思います。信仰を伝えることは、そのうちのひとつだと思います。より正確に言つならば、伝える以前の自身自身の問題があり、それが難しいのです。その問題とは具体的に何でしょうか？

弟子たちは、カファルナウム (Kfar-Nahum : Nahum's village ナホムの村) で宣教するために舟に乗り込んで、向かうのです。ここは他の福音書にもあるようにイエスがおもに宣教の活動をなさった街でした。そこに弟子たちが向かうより前の話です。

まず自分たちの舟にイエスは乗っておられません。そして強い風が吹いてきて海は荒れます。すなわち宣教活動に向かう前、弟子たちがおかれた状況はとても厳しいものだったといつていいです。

16夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。17そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。18強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。19二十五ないし三十スタディオンは漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。20イエスは言われた。「わたしだ。恐

れることはない。」21そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

「彼らは恐れた」…恐れとは自分の人生についてのイメージ、家族や地域、学校などの社会と自分なりのつながりかたを保つことによって生きている、生活の基盤を揺り動かすものであるとある心理学者は定義します。確かに、今自分の生活が安定しているならば、それを脅かす相手は恐れるべき対象となるでしょう。

しかし、もしも何の不安もない、何も恐れるものもないとすれば、どうかといえ、人はそれに耐えることができなるといわれています。なぜならそれは死んでいるのと変わらない状態だからです。さらに、恐れを抱えて行き着く先には二つの局面が待ち受けているということです。一つは破局、滅亡であり、もう一つは新しい道が開かれるということです。とすれば恐れは人生の分岐点であるともいえるわけです。(河合隼雄)

イエスの弟子たちが直面した事態は、彼らのいのちに関わる危機でした。荒れ狂う海で舟もろとも沈没して死ぬかもしれないという状況におかれたのでした。このような危機的な状況に対して人がなし得ることは、海を静めること、もしくは荒海にあらがってなんとか舟を手繰って行くしかありません。

その荒れ狂う海の上をイエスが歩いてこられるのですから、海を荒れ狂わせ、自分たちのいのちを翻弄しているのは、イエスであるかのような錯覚を覚えたのでしょうか。

「19二十五ないし三十スタディオンは漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた」のでした。恐れは、その先に破局、滅亡に導く相手に対して起こる感情ですから、弟子たちは、イエスが自分たちを救う方ではなく、破滅に導く方であると受け止めたのでしょうか。

(フランクフルは「識られざる神」という著書の中でこういいます)「信仰性が侵害されるとき、それは一見無様になる。そして自らの内部で天使を抑圧している者にとって、天使は悪魔に姿を変えてるのである」と。現代においては、理性や技術的な悟性が信仰を抑圧し、信仰は迷信に墮してしまつのだといえます。

つまり、弟子たちは彼らの心中で神に遣わされたイエスを真に理解しようとせずに、誤った自我を固定化させ、変えられて成長していくことを拒み、真実なる存在を抑圧するからなのです。自らの豊かな可能性をもった心を縛り付けて抑圧しているゆえに、「滅ぼされる」と直感的に察知したので、それは生きていたいという欲求が裏返しに、認知された状態なのです。

おなじような場面がイザヤ書にもあります。預言者イザヤが神と出会う場面です。神を仰ぎ見たイザヤは「わたしは滅ぼされる」と言つたのです。これがイザヤが預言者として立てられる際に起こった出来事だったので、恐れあまり滅ぼされるといふ感覚は、イザヤがそのままでは神の働きにふさわしくないからでした。神の言葉を預かりひとびとに告知するために、彼の唇は浄められなければなりませんでした。

ちを召し出して、宣教に遣わすことなすむるのです。

キリスト教ではありませんが、本質的に通ずるある禅寺でのお話しをご紹介します。禅宗には接心という一週間程度集中して座禅をする修行があります。ひとの心には自分の身を守り、恐怖を避けて、自分が生き延びたいという欲求があるので、この修行期間中に、普段はあまり知覚されないそういう自我が出てきて、ただ座ることに意味を見いだすことができずに「自分はこのまま死ぬかもしれない」と思い詰める心境になるというのです。そこでお寺の住職さんは、接心が始まる前にこう言うのだそうです。

「明日からの接心の最中に死にそうになるときもあるかもしれない。でも大丈夫だ。本堂の裏の墓場には、まだまだ空きのスペースが残っている。戒名をつけてあげるから安心して死ぬがよい。」

だれも本能的に危機、恐れ、死を遠ざけようとするのでしようが、それが避けることができないならば、その状況に自らを委ねるしかありません。おなじ言葉でも、自分の態度いかにより意味がわかる存在と言葉があります。イエスが、恐れるべき存在なのか、それとも救いに導く存在なのか…。

そこで、彼らがイエスを認識する切っ掛け、それは同時に彼らが自らを抑圧している心を解き放つために、イエスが発した言葉「わたしはある(エゴエイミ)、恐れるな」というものでした。この言葉は、モーセが神にその名を尋ねた時に返された神の応えとおなじ言葉です。「わたしはあろうとする(鈴木訳)」(出3:14)という言葉とおなじ答えなのです。神がモーセを呼び出し、イスラエルの民を奴隷から解放するために遣わしたように、イエスは弟子た